



兵庫県伊丹市
とく歯科
院長 徳田 進之介

「スペースライン」の誕生以来、モリタでは「スペースライン」とエリアキャビネットを活用した診療システムを提案してきました。そこでデンタルマガジンでは、開業時から上記の診療システムを採用され、日々精力的に診療を続ける歯科医院を取材し、そのメリットや有用性についてお話を伺います。第1回目は、「とく歯科」院長 徳田進之介先生です。

— 「スペースライン」との出会いをお聞かせください

臨床3年目の頃、う蝕の取り残しがあったり、補綴装置がうまく適合しないことなどが多く、とても悩んだ時期がありました。その悩みを克服するために、様々なセミナーを受講し試行錯誤の日々が続いていましたが、ある時、麻生昌秀先生が講師を務めるミラーテク

スペースライン+エリアキャビネット導入医院様に聞く ①

開業時のチェアユニット選びは私にとって最優先課題でした

ニックのセミナーを受講して、ようやく解決の糸口を見つけた思いがしました。私はこれまで、治療後のチェックのためにだけにミラーを使用していましたが、そのセミナーでは、直接ミラーで見ながら切削していく手技をレクチャーしていたのです。ミラーで見ながら削っていくのと、切削後にミラーでチェックするのでは、かかる時間や精度がまるで違います。「このミラーテクニックを習得すれば、今までの悩みはなくなる」という確信が持てました。その後、さらに学びを深めていく過程で、pd診療に出会いました。「pd」(proprioceptive derivation)とは、人間が潜在的に持っている筋肉のコントロール感覚のことを指し、pdを意識することで、より快適な診療姿勢を導き出すことができるとされていました。ただ、pd診療では、専用のベッドタイプのチェアユニット1台に対して、エリアキャビネット1台を設置して診療することを理想としていました。当時、勤務していた父のクリニックでは、ベッドタイプではなく一般的なチェアユニットでしたので、そのチェアユニットを使いながら、できる範囲でミラーテクニックに取り組んでいました。ただ、どうしても様々な部分でストレスを感じ、思ったようにできませんでした。そこで、父に頼み込んで、1台だけ「スペースラインフィール21タイプN」という専用のチェアユニットを導入してもらいました。そ

れが「スペースライン」との出会いです。

— 開業後に「スペースライン」とエリアキャビネットを使用されて感じるメリットを教えてください

「疲れにくい」ということがいちばんです。無理のない診療姿勢を保つことができるので、長時間診療していても楽です。ものの配置やデザインが細部まで決められているので、考えることも少なく、決断も早くできます。また、チェアユニットの背板を起こす操作が不要なので、診療に集中できることも気に入っています。エリアキャビネットについては、診療室内で治療を完結できることが大きなメリットです。キャビネットに必要な器具や器材を揃えておけば、材料などを取りに立たなくて済みます。私だけでなくアシスタントも診療に集中でき、結果としてチェアタイムの短縮にも繋がると考えています。

— 開業後、ご自身の診療スタイルに変化はありましたか

開業してからは、診療の質をより高めたいという意識が強くなりました。背景として、勤務医時代の臨床3、4年目は、ひたすら「自分ができなかったことをできるようになりたい」と思っていました。pd診療ができるようになってくると、「精度が高く、緻密な治療を行うためにはどうすればいいのだろう」という、一段上のステージに上がることができたと思

います。開業後は、さらに技術を磨いて深みのある治療を目指すようになり、今まで以上に楽しみながら診療を行うことができています。

— アシスタントと連携するメリットや留意されているところはありますか

診療中は治療に集中したいという思いが強いので、診療の流れやアシスタントワークを事前に学んでもらっています。タービンとバキュームをお一人で持って診療をされる先生もいらっしゃるかと思いますが、効率も良くありませんし、精度も上がりません。当院では、歯科医師とアシスタントによる「4ハンドシステム」が基本です。アシスタントがいてくれることで、初めて効率良く、気持ち

良く診療できますから、常に二人一組のコンビで診療している感覚ですね。

— 今後開業を目指す先生方にメッセージをお願いします

開業に必要な費用は年々上がっていて、チェアユニットに割ける予算は少ないかもしれません。ただ、歯科医師は日中の大半の時間を診療室で過ごします。診療システムに少しでも無理があると、ストレスは日に日に蓄積されていきます。とくに歯科医師の場合、頭や目、首、腰など様々な部分に負担がかかりますから、開業の際には10年後、20年後の自分のコンディションのことも考慮しながら、診療方針や機材選びを考えていただければと思います。



私は開業以来、常に楽しみながら診療を続けていますし、開業して良かったと心から思います。私にそう感じさせてくれたのは、「スペースライン」とエリアキャビネットによる診療システムのおかげです。今後開業を目指す先生方も、長い歯科医師人生を歩まれるにあたって、悔いのないチェアユニット選びを検討いただければ幸いです。

「スペースライン」とエリアキャビネットを日々お使いのスタッフさんにお話を伺いました。



歯科衛生士
鈴木 捺美

当院には2024年4月に入职しました。ベッド型のチェアユニットは当院で初めて目にしました。最初は、うがい用のスピットンがないので、「患者さんは大丈夫なのかな」とか、バキュームを使った口腔内洗浄をマスターする必要

があるので、「うまくできるかな」などの不安はありました。最初はうまくできないこともありましたが、先生や先輩方に丁寧に教えていただけたので、今はスムーズにできるようになったと思います。うがいのために、背板を起こしたり寝かしたりする必要がなく、その分処置や説明の時間に充てられることが大きなメリットだと思います。また、院長のアシストについていた際も、キャビネット内に必要な器具や器材が常に揃っている

感じます。患者さんも「うがいがないのも気にならない」と言ってくださいますし、口腔内洗浄も「気持ち良い」と好意的に受け入れてくださっています。



とく歯科では、診療時間を長めにとり、一人ひとり丁寧に診る方針をとっている。



受付兼歯科助手
上霜 美里

半年前から受付兼歯科助手として当院に勤務しています。この診療システムは、座位のままアシストできるので、腰痛の心配もなく体力的にとっても負担が少ないことが嬉しいですね。また、手の届く範囲に全ての道具や材料が

揃っているため、いったんツールに座ると診療中に立つことがほとんどないので、アシストに集中することができます。エリアキャビネットの引き出しは、スタッフ同士で相談して使用頻度の高いもの

から順に保管するようにしているため、便利です。また、作業台も広くて使いやすいので、印象材やセメントを練る際など、とてもスムーズに作業でき、助かっています。



エリアキャビネットの引き出しを見せていただいた。使用頻度の高い順に整理されている。



「アシスタントワークは主にモリタのテキストや動画で勉強しました」と上霜さん。